

## 美術の窓(14)

## 水墨画展から東西交流展へ

大和文華館館長  
吉川 逸 治



樹下説法図 大英博物館蔵



毘沙門天像 当館蔵



維摩居士像(部分) 文清筆 当館蔵

冬の日に、水墨画展が過ぎ、立春を終えて梅の花が咲きはじめるころ、東西交流展が開かれますと、度々のNHK・TV放映でお馴染みになった昔の交易盛なりし西域の文物が想い出されます。昨年、奈良の国立博物館の特別展で陳列された大英博物館(ロンドン)の「樹下説法図」の明るい色どりの画像が眼前に浮びます。

煌煌からクチャ、キジールなどの濃厚な色彩の壁画などと思えずと、今終ったばかりの水墨画の世界とあまりにも違うのにとまどいます。しかし、唐の都の寺々には、西域から来た彩色画の大家や彼らの弟子たちが描いた画像で飾り立てられ、凹凸花といわれたり、あるいは身体が壁から抜け出すといわれたほど、鮮やかな色彩で現実の印象を記した立体的で、躍動的な画像が描かれていたと思うと、その一端でもこれら西域から齎された画像のうちに感取したいと思いたくなります。

大英博物館の「樹下説法図」に対して、大和文華館の「毘沙門天像」も極彩色の仏画でクチャ出土の唐代の作品といわれ、同じ彩色画で辺境で発見された唐画でありながら、すでに作風は異っている点が

注意を惹きます。都の長安の寺観には唐代隨一の大家吳道子が盛んに白描の壁画を描いたというので、中国伝統の墨線描の作品が西方伝来の彩色画と競って、しかも写実性でも一歩も譲らなかつたでしょう。白描画ですから、少し遅れて出現する水墨山水の様式とはちがって、墨線に抑揚、律動はあっても、墨面を伴わず、むしろ微妙な陰影を添えて人物生動の真を描出したものでしょう。

その描法は後世、水墨画展の文清の「維摩居士像」の顔の描写に見られる如く、線はあれども微妙な淡墨の陰影法と和して顔の細部の真をあらわす手法だったのでないでしょうか。白描淡彩画も同時に行なわれていたでしょう。唐画と伝えられる古画の人物像に細い墨の描線で輪郭をとって、なかに淡色の赤、朱や黄土、淡墨を塗る描法が見られます。

これに対して、大英博物館の「樹下説法図」は豊かな暖色調で彩られ、いかにも壮な唐朝仏画の西域流の画風を示す一例でしょう。緑葉で飾られ、短縮図法で描かれた天蓋の下に赤衣の釈迦が華やかな蓮華座に坐り、前後左右に菩薩や僧形の人物たちが取囲むように列び、

周囲の空間は淡い中間調の黄土色で満たして雰囲気は漂わせます。人物たちは遠近関係のなかに自然な姿勢をとり、顔や身体は暖色の肉肌色に明暗の暈取りで、立体感から触感まで示します。釈迦像が他に比して大きいのは宗教図像の観念性に譲歩しているのですが、全体は豊かな彩色で造形し、墨線も目立たず、古典古代の自然主義の画風をよくもここまで復興したものだと思わせます。

法隆寺金堂の四大変相図なども当初は色豊かに壮な景観を呈したものだだったでしょうと、この「樹下説法図」を見て想像させられます。しかし、法隆寺の壁画はこれに比べると、鉄線描の輪郭線が目立ち、人物の顔や姿勢に、また群像構成に一段と整理された宗教図像の要請が表われ、大寺の壁画としては適しい様式になっています。それだけ、裕然たる自然主義の豊かさからは遠ざかります。法隆寺の壁画も唐朝仏寺の壁画様式の一つに相違ないのですから、唐朝壁画の様式の様でなかったことに興味があります。

ところで、大和文華館の「毘沙門天像」はクチャ出土といわれますが、もう一つ異った唐代仏画様式を示

すものではないでしょうか。これは強い赤や緑、青、黄の色彩効果で、いかにも西域的な様式感がありますが、赤褐色の顔のしっかりした写実的なデッサンは訓練された腕前を示します。筆こまかく陰影を入れて、眼頭を寄せて額にもり上げる皴を描き、大きな鼻を突き出させ、厚い唇をむすび、広い頤に厚味を示し、太い頸に幾重にも肥えた皴の曲線を重ねるなど、その細かい唐草模様をつけた宝冠とともに、西域の民芸的様式の作家の筆とは思えません。民芸的との感じを与えるのは、平板な緑の円光とバックの赤い平面、その上に漂う縹緗彩色の青や緑、黄、赤の渦巻雲の模様風な形状で、毘沙門天の鎧の緑と黄、赤革の上衣とその白と紺青の縁取、黄と緑のブローチ、青・黄・白の帯の獅子面など衣装も彩色は縹緗風です。この画でも、色で造形して、描線は目立ちません。そして「樹下説法図」とちがうところは平面性の強調が空間や雰囲気をも圧倒して、図様性を強調するからで、しかも、人物像は立体性に基づく写実主義を守るという点がこの画の特徴で、塞外民族のプリミティヴィズムと唐朝絵画の自然主義の結合の結果でしょうか。

季刊 美のたより No.70

昭和60年2月21日

発行 大和文華館